

この原稿（日本義肢装具学会誌 vol. 32:216-219, 2016）をお読みの皆さんへ

2016年12月31日

この原稿は日本義肢装具学会から依頼されて執筆したものです。本文中での” adapted sports” という用語の位置づけに関して、この用語は国際誌や英文の本のなかでも使用されているので「和製英語」ではないのではないかとのご指摘も受けていますので、一応、以下のような注釈を付記しておきます。また、NHK から“障がい者スポーツ” から“パラスポーツ” への言い換えに関するお問い合わせも受けましたので、それに対して会長（当時）としての対応文も付けておきます。併せて、ご笑覧いただき、より深い議論への材料としていただけることが少しでもあれば、執筆者として望外の喜びです。

（文責：いわおか）

（以下、注釈文です）

ご指摘のように、” adapted sports” という用語が論文の中にも本の中にも用いられていることはもちろん、存じ上げております。” adapted sports” に限らず、元々、言葉とか用語自体は時代とともに使われ方も変わるものですし、用語の議論に拘泥することには意味がないと個人的には考えています。

先日はNHK から問い合わせがあり、” 障がい者スポーツ” を” パラスポーツ” と言い換えることに対する意見を求められました（日本障がい者スポーツ協会自体が” パラスポーツ” と言い換えようとしているそうです）。

それで、一応、次のような感じで説明してみました。少し関連する部分があると思いますので、お読みいただければ幸いです。

われわれとしては「障害者スポーツ」という表現は狭義に過ぎると考えていますが、日本障がい者スポーツ協会がいみじくも言い換えと仰っているように、「パラスポーツ」という表現でも同様の懸念はあります。

また、「パラスポーツ」はパラリンピックのparaとスポーツをくっつけた造語になりますが、ご存じの通り、パラリンピックは主に中途障がい者のなかでの競技的卓越性を競う場ですので、障がいのある方々のスポーツや身体活動と必ずしも一致していません。

例えば、障がいのある多くの子どもたちにとってパラリンピックはそれほど近い存在ではありません。両者の間には *disconnection* が生じています。その状況は添付した田添先生（当時、全国特別支援学校肢体不自由教育校長会会長）が記された寄稿文（アダプテッド・スポーツ科学 vol. 13:51-53, 2015）をお読みいただければと思います。

したがって、「パラスポーツ」を狭義にパラリンピックのスポーツととってしまうと、障がいのある子どもたちや高齢者、あるいは何らかの理由によって固定化されたやり方では楽しむことができない現状に置かれているひとたちのスポーツや身体活動があまり含まれてこないかもしれないという懸念があります。

もちろん、プロモーションの効果を考えれば、「障害者」という表現を避けて「パラスポーツ」を広義に解釈するのが戦略的に有効であろうと私も考えます。

東京 2020 後はまったく一顧だにされなくなるであろう障がいのある子どもたちやひとたち、高齢者の方々が当たり前前にスポーツや身体活動を楽しむことができるよう、「オリパラ」の追い風に強かに乗って環境を一変させておきたいとも考えますので「パラスポーツ」という表現でハードルを下げるができるのなら、それも良しと思ったりもする次第です。

本学会としては「アダプテッド・スポーツ」の考え方（添付の論文をご参照ください）が広く浸透していくことを願っていますが、「障害者スポーツ」を標榜する他の学会などからは「アダプテッド」では意味がわからんというような批判もあるでしょう。

「障害者」にするか「障がい者」と表すかの議論にも似て、いささか不毛だと個人的には思っています。

私個人としてはスポーツは誰にとってもスポーツであって、対象者や対象者の状態によって名称を変える必要はないと考えています。「子どもスポーツ」とか「妊婦スポーツ」とか、変ですよ。

それに、いまのオリンピックなどのチャンピオン・スポーツだって、ルールややり方は絶えず変わり続けている（アダプトされている）のが本質ですから、そういう意味ではすべて「アダプテッド・スポーツ」と言えなくはないわけで（苦笑）。

ということで、「障害者スポーツ」を「パラスポーツ」と言い換えられることは不適切だとは思いますが、その際に抜け落ちてしまうかもしれないいくつかの問題や生じる恐れのある懸念について配慮していただき、特に障がいのある子どもたちやお年寄りのスポーツや身体活動へのまなざしが無視されないよう、十分留意していただけることを願うものです。

さて、本題の” adapted sports” ですが、今回依頼されて書いた原稿の中では名称に関しての議論をするつもりもありませんでしたし紙幅もありませんでしたので、簡潔に、” 国際的によく言及される adapted physical activity (APA) という用語に由来する和製英語である” としました。

その意味するところは、この” アダプテッド・スポーツ” という用語を導入された矢部先生が例えば『アダプテッド・スポーツの科学』（市村出版）のなかで記されていた、” APA に馴染む訳語が見あたらないので、意識を試みた・・・「アダプテッド・スポーツ、adapted sports, AdS」 という既成の概念にとらわれない造語を提唱する次第である” （前掲書 3～4 ページ）に込められた想いを尊重してということになろうかと思えます。

上記の矢部先生の文脈に依れば、矢部先生の中では” アダプテッド・スポーツ” は APA のことであり、過去や現在の本や論文のなかで用いられている” adapted sports” とは重なる部分があっても同一ではないだろうと考えてのことでもあります。

そういう意味では、和製英語とするよりも造語とした方が適切だったかもしれません。

誤解を避けるためにも、また議論をより深めていただくためにも、ご指摘に対する応えというよりは執筆者の意図について、学会 HP に注記しておこうと考えているところです。

貴重なご指摘、ありがとうございます。重ねて感謝申し上げます。

(以上が注釈文でした)